

土屋文明の別府来訪に関して

佐藤嘉一

一

大正、昭和の短歌史上不滅の足跡をしるした土屋文明は、八回別府市を訪れている。同じくアララギを育ててきた斎藤茂吉の来別は、本紙第十号で記したように、ヨーロッパ留学を前にした医事視察を含んだもので、はっきりと月日の分かっているのは一回だけであった。文明の方が来別回数が多いのは、作歌上囑望していた徳田白楊と金石淳彦の両名が、期間の長短はあるが別府市に居たことと、アララギ会員の作歌力を高めるには、直接指導を惜しまない姿勢を終生とり続けたからであろう。

アララギも姿を変えてしまった現在、誰かが文明の来別を記さない限り、年とともに事実を知る人は減り、記述は難しくなる。そのことから敢て筆を執った次第である。以下、来別の様子を年代の順序に従って記すが、現

に生存する方以外は文中での敬称を省いた。

最も早い来別は昭和四年九月である。前年より大分新聞短歌欄の選者をしていたことが、その契機となった。

前の選者は若山牧水で、その牧水が昭和三年九月十七日に病歿した後、請われて選を行うことになった。近代短歌史の上では、牧水は自然主義的短歌作者とされるが、土屋文明は現実凝視の厳しさと、即物的詠風を加えつつあって、牧水とは明らかに相異なるもので、その文明を選者として迎えた大分新聞関係者の達見には、今でも私は敬意を抱いている。実際に選を始めたのは昭和三年十月からで、その二十三日号に「大分歌壇の選をする始めに当たりて」と題したかなりの長文を載せている。（この文章は従来殆ど知られていなかった。先年、当時のアララギ編集委員の清水房雄氏の依頼もあって、大分新聞

選者に正確にはいつからついたかを、県立図書館所蔵の大分新聞マイクロフィルムで探して見出したものである。前文を掲げるには長いので、地元^二に直結する部分のみ抜粋して挙げることにする。

一寸見ただけでも本紙の寄稿家諸氏の作品にも、強ひて歌言葉にするため、強ひて流行の歌調に倣ふため、反つて言葉の無理や表現の不明瞭を来しているのが可成目につく。(中略)大分地方は古来地方として特色ある文学者、芸術家を沢山出した所と聞いて居る。段々地方の特色といふものの少なくなつてゆく現代にあつて、我が大分歌壇の諸氏によつて中央などには顧慮しない特色ある作品の出で来らむことは決して希望して得られないことではあるまい。縁があつて本紙歌壇に關係するを得たる好機会に臨んで、大に大分歌壇諸氏の奮起を冀つて止まない次第である。

すでに大正六年より雑誌アララギで選をしてきたが、新聞短歌欄の選者となつたのは最初であつた。大分歌壇として、中央には顧慮しない「特色ある作品」を制作するよう述べているところなど、傾聴すべきことである。

昭和四年には、第二歌集「往還集」(大正十四年〜昭和四年)の「巻末記」に、「この年は安居会を休んだので自分は単独で九州を旅行して来た。鹿児島に於ける岡村氏、村田氏、大分に於ける内本氏その他多くの人々に厚意を受けたがと記している。このところを月日を挙げて具体的に示すと次のようになる。八月二十五日、福岡アララギ会。二十七日、鹿児島歌会。二十八日、霧島丸山温泉虹山荘歌会。三十日、熊本歌会。九月一日、大分歌会。二日、中津歌会。以下、高松、倉敷、大阪と廻つて九日に帰京している。

この九月一日の大分歌会は、大分新聞主催の会で、文明が上記の通り選をしていることから、その指導者として招請された。会場は市の公会堂であつた。この時、新聞選歌で清々しい佳作を多数採られて、文明もはつきり記憶していた徳田白楊(当時十九歳)が、紺緋の着流しで出席しており、その様子は「徳田白楊歌集」の序文で文明が詳しく記している。徳田白楊は翌昭和五年より別府の中村病院に入院することになるが、それについてはもう少し後で記すことにする。

さて、「往還集」昭和四年の頃に「別府」と題して、青山のはさまに立てる温泉のけむり夕かざろひにあはれ白しも

蜻蛉は虫といへども血の池におびただしくも浮きて死にたる

の二首がある。後の歌の三句目に「血の池」とある通り、血の池地獄での囑目の作であり、前の一首は、血の池地獄と限定せず、例えば郊外の鉄輪付近を想定しても十分に通る歌である。いずれも確実に見るべきものは見えており、写象鮮明な作品といえる。八月三十一日と歌会当日の九月一日は、大分市の内本紅蓼宅（大分市荷揚町。氏は九電に勤めていたと聞いている。）に泊ったといわれるから、（瓜生鉄雄「感慕泉」より）特に歌会等の所用の入っていない三十一日の夕刻、血の池地獄等に足を運んだのであろう。

二

徳田白楊は、大分歌会席上、土屋文明の警咳に接してからは、いよいよ作歌に集中し、「前と同じ素直な清す

がしい、しかも自らの生命を深くかなしむ自らなる調べによって歌作を続け、」（徳田白楊歌集）序文。文明の記す序文である。以下「歌集序文」と略記）て、それを文明選の大分新聞短歌欄やアララギへ提出して行った。歌集の年譜をみると、「昭和五年六月に腎臓を病み、別府中村病院に入院し左腎臓摘出手術を行ふ。八月十日退院し新町林旅館に病を養ふ。」とあり、僅か十九歳にして余命幾何もない大患にあった。当時の中村病院は、今の浜脇二丁目の河下医院という。別府での白楊の療養生活については、本紙第四号の拙文「別府で開かれた『九州小安居』」で記した通りである。ここではそれとの重複を避け、またこの後、文明が白楊の歿後訪れた松原公園との繋がりの上から、白楊の松原公園にて詠んだうちのさらに三首のみ挙げることにする。

わが病いまだ癒えざるにこの夕べ松原公園にひとり
来にけり

世界館の前すでに人こみ合ひて楽しき夕べとなりゆ
くらしも

わがこころいたむ時来て公園の桜落葉をふみてあり

くも

この年十月に帰郷。旧制竹田中学校に通いながら療養に当り、翌六年三月、認定及第の名目で中学卒業を迎えた。その後、病篤く、病床に呻吟する日々であった。そうしたなかで、

宵々に雁鳴き渡るこのごろのわがむらぎものこころ
寂けし

ほかの「雁渡る」七首があり、「歌集序文」に「これらは特に佳作であるが、徳田君の歌には全体にわたつてかういふ独自の境地を掴んでしかも澄み切ったものがある。」と激賞されるほど、二十一歳の青年にしては実完成度の高い作品を残したのであった。

文明は、昭和八年一月四日から六日まで、鹿児島阿久根温泉での九州アララギ歌会に出席し、帰途、大分新聞社で談話会を開いた。鹿児島への途次、別府に立寄っており、これが二回目の来別である。そのことは「歌集序文」にも見えるので次に挙げる。

昭和八年一月、私は再び鹿児島への途次大分を過ぎた。徳田君のことを思ひ、すでにその病気の経過からして

命の益々迫つて居ることを感じ、黯然たらざるを得なかつた。途中から同行の吉田正俊、飯野真澄両君と共に慰安の絵葉書など書いた。作品のみによって徳田君を知っている両君は旅程を都合して病床を見舞ふことを主張された。年の始で休んで居る別府の本屋で地図を求め、大野郡上緒方村を探して交通の具合を調べたりした。けれども土地の人に聞いても、交通の点が必要を得なかつた。私もこの時もまた突然の訪問が徳田君を喜ばすよりも、病気に悪影響を及ぼすことを恐れて、両君の言に聞いて見舞いを決行することが出来なかつた。

昭和八年当時、別府市内で本屋を開いていたのは、元三河屋書店主北村正夫氏によれば、次の三軒とのことである。一つは三河屋書店で、元町の現在氏の居住している場所にあつた。一つは明倫堂書店で、流川四丁目角の現在の西日本銀行の所にあつた。一つは金泉堂書店で、流川通の現在のおきな堂の所にあつた。他の商品と共に本を置いていた店も二、三あつたが、教科書も扱う専門書店であつたのは右の三軒で、地図を求めたのは、この

うちの一軒であったことは先ず間違いあるまい。

鹿児島からの帰途、大分新聞社で歌談会を開いた文明は、白楊の歌を独自の境地に達し、澄み切ったところのあるのを大いに称揚した如くである。その十日ほど後の一月十九日、白楊は僅か二十三歳でその生涯を終えた。

歌作を始めた当時から高い作風を持っていた白楊は、文明が大分新聞の選を担当すると直にそれに投稿して、作品の質を格段に高める機会を得た。さらにアララギ会員

となつて、新聞、雑誌両面のよき指導者のもとで独自の歌境を開き得た。本人の高い資質をより高く深く伸ばすには、よき指導者にめぐり合うことによる顕著な例をここにみる思いである。白楊の死後、一年余り経た昭和九年六月に、文明の編集と長文の序を付して「徳田白楊歌集」が刊行された。以後、昭和三十三年に再版、五十一年に三版、六十三年には四版まで刊行され、その都度、文明の簡潔だが気持の溢れる言葉が添えられている。年少の作者で且つ短歌の如き小詩型で、かく四版まで版を重ねて刊行される例は滅多にない。別府で詠んだ「病中雑詠」四十一首、「松原公園」十八首も、この歌集によつ

て永久に人々の間に伝えられることになった。

三

土屋文明の第三回目の来別は、昭和十年一月五日から八日朝まで、浜脇土佐屋旅館で行われた「九州小安居」に出席指導したのがそれに当たる。このことについては本誌第四号の拙文「別府で開かれた『九州小安居』」で述べたので、重複を避けて若干記すに留める。

第三歌集「山谷集」（昭和五年〜十年一月）は、日毎に軍国主義化する時代や社会の動向に対する率直な表白に満ち、これまでの諸作から一層大きな飛躍をとげた作品を集めている。斎藤茂吉に代つてアララギの編集兼発行名義人となつた年から始まり、身辺多忙を極めた時期であった。その後、続く第四歌集「六月風」（昭和十年二月〜十二年）の冒頭に「別府松原公園にて徳田白楊を思ふ」の四首がある。そのなかの後の二首が直接別府に關係しているのでそれを挙げると、

町の中にわづか松ある公園を命よるこびゆきし君は
も

相寄りて君をかなしみ橋わたるほのぼの清き三日月
立てり

「九州小安居」の小憩時（昭和十年一月六日か七日夕食後の）に参会者の数名と外出した折の作で、「わづか松ある公園」は、白楊が病を養っていた当時の松原公園である。今、公園に来て白楊のことを思い出している一首だが、「命よろこび」は、病のやや落着いた、暫しの間の安堵に似た「よろこび」である。「相寄りて」の歌については本誌四号の小文で触れたので、ここでは省略するが、いずれも白楊を惜しむ気持が一首のすみずみまで行き届いた作である。

第四回目の来別は昭和十三年三月十一日である。三月七日、九大愛育館で福岡歌会。十日には熊本医大歌会。十一日には大分歌会を「別府北浜寿旅館」で行なわれたと「土屋文明論考」に記している。

この時の様子を伝える資料は私の手許にはないが、瓜生鉄雄歌集「仏桑花」（昭和四十二年刊）をみると、この昭和十二年の作に、

夕かぎろひに吾が立ちて見る湯煙をあはれ白しと言

ひし君はも

があり、これは文明が昭和四年第一回目の来別時に詠んだ、上掲「青山のはざまに立てる」の一首を想起して歌ったと思われ、歌会時に提出した作ではないかと推測する。氏は文明が別府に見えてのこれまでの三回の会すべてに出席しているし、これから後の来会時のすべての世話にも当っている。なお、この時の会には、当時作歌していた猪股辰彌（この時、市内小学校訓導、のち付属小学校訓導となり、戦後は文部省に勤めた。）も出席したとのことで、会場は流川の竹屋旅館であったと、令弟猪股静彌氏から平成十年二月に聞いたばかりである。そうなると、上記「文明論考」の記述と違ってくるが、何を採るべきか、私には分からない。

四

太平洋戦争後、文明の作歌活動はいよいよ旺盛で、現実直視の作歌姿勢はさらに強まった。選歌の上でも、実生活のなかから生まれた実感溢れる作品を多数掘り出し、近代短歌史の上でも「文明選歌」の名で特に注目される

働きをした。また、ライフワークともいえる「万葉集私注」の著作にも着手し、確実に刊行が進められた。

このような活動のなかで、昭和二十九年十月二十四日、大分市威徳寺での歌会に出席し、指導に当たった。福岡、熊本、宮崎と廻り、二十三日に佐伯の歌会に出たあと、その夜は別府北浜の花菱ホテルに宿泊した。これが第五回目の来別である。二十四日朝、威徳寺の瓜生鉄雄が迎えに行った。その時に突然、文明の方から「瓜生君、歌を書こう。」と言い出して、墨、硯をとり寄せ、半折に書いたのが次の一首である。(ここの所は直接、瓜生氏から聞いたことである。)

とどこほる水に立ちたる菖蒲の葉するどきは石を押へむとする

昭和二十一年五月、益田市万福寺で詠んだ作で、第七歌集「山下水」(昭和二十年～二十一年)に収められている。下句に写生の到達した姿を見る如き歌である。立派に表装して、威徳寺の書院に掲げていた。

歌会場は上記のように別府市ではなく、それを記せば拙文の題目から外れるので省略するが、この二十四日夕

刻、文明は松山へ向かった。

五

第六回目の来別は昭和三十四年十月十八日の金石淳彦追悼歌会の出席がそれである。

文明選歌のなかでも際立った存在で、また「短歌研究」等の雑誌にも作品を掲載していた金石淳彦は、昭和三十四年八月二十三日、上田の湯の武藤幸治方で死去した。四十七歳であった。京都大学経済学部在学中に咯血し、卒業後も回復することはなかった。昭和十六年九月に鶴水園の叔父の別宅に寄寓、療養するようになったのが別府在住の始まりである。(十八年七月に上田の湯の武藤家に移った。)

優れた歌は沢山あるが、ここではそのこととは別に、詠まれた場所が別府市内で、それが明かに出ている作を三首だけ挙げておこう。

身振りのみ見えぬ徳田球一を扉口よりのぞき立去る
(昭二三)

図書室に雑誌一冊読みて帰る病みゆる日々のけふの

しるしとして

(昭二五)

遠き樟淡きみどりになりたりとある日簾をあけてお

どろく

(昭三二)

初めの一首は、今の中央公民館に、当時の共産党書記長徳田球一が来て演説会を開いた時の様子である。次の一首も同じ中央公民館で、その頃は半地下室となっていた今の講座室の辺に図書館があった。病のよい日には、そこで雑誌を読んでいた。岩波の「世界」や、その頃まで刊行していた筑摩の「展望」などを読んでいたらと聞いている。最後の歌は、病室の窓からは北西に当たる宮地嶽神社の方向にある樟を見ての作である。

歿後、昭和三十五年に「金石淳彦歌集」が刊行されたが、その序に土屋文明は次のように言っている。

金石の歌集編集に協力しながら、私の感じたことの第一は、金石が実によく生きたといふことであつた。実に清く生きた。実に美しく生きた。さうして実に強く生きた。金石は病氣をした。(中略)それなのにさうした外面の事情に屈することもなく、甘えることもなく、ただひたすらに自分の生を生きたやうだ。勿論金

石も金石の時代に生きた所謂知識人の一人であるから、

金石の作品の強弱深淺もおのづからそのことにつながらつて居るであらう。(中略)ともあれ、私は本集の編

集のため金石の作品を通覧して、金石の一生は尊敬され、その歌境は重視されるべきだといふ感慨を新にした。

この文明の言葉以上の評言は他にないと思つてはいるが、それだけに、生前からの金石淳彦の作品と生き方に、文明は注意を払つていた。死後間もなくの昭和三十四年十月十八日に、豊泉荘で開かれた金石淳彦追悼歌会に、アラギ編集の実務上の責任者であつた五味保義とともに出席したのも、このような背景があるからである。

会には県内は勿論、西日本各地のアラギ会員が集まり、豊泉荘の会場大広間も溢れんばかりであつた。

この時の文明は「金石淳彦追悼歌会 於別府」と題した五首を第九歌集「青南集」(昭和二十七年〜三十五年)に収めており、また五首とも岩波文庫版に収めている。この中から三首だけ挙げる。

つらなりて写れる二十四年前亡きをば数ふ生きて相見て

生徒服着たるは金石ともう一人そのありし様も我は忘れぬ

ほのぼのとダチュラの花の花かげに歎きは長し生けるよすがに

最初の歌に見える写真は、上記三回目の来別にあたる昭和十年一月の「九州小安居」時に撮ったそれを指す。

この写真は本誌第四号の拙文三十二頁に掲げているのと同じのものである。二首目もその写真を見て歌ったもので、「生徒服着たるは金石ともう一人」とある金石淳彦は、写真二列目の左から二人目。当時、旧制佐賀高校文科三年生であった。「もう一人」は、後列右端の芳賀日出男である。後年、都城で医院を開き、終生アララギ会員であった。当時は医専生徒か、医学部の学生であったのであろう。最後の歌に見えるダチュラは、的ヶ浜にあった錦水園の温室内に咲いていたものと聞いている。

歌会終了後、その夜の寝台列車で帰京したから、この歌のダチュラは十月十七日か、十八日の歌会の前に見たものと思われる。

徳田白楊も金石淳彦も峻厳な土屋文明の薫陶によく応

えた数少ないなかの人物であり、その点から大いに囑望される存在であった。その死後、文明がわざわざ別府を訪れたのも、両名を惜んでのことであったが、このようなことは文明の生涯のなかでもそう数ある例ではない。見込んだ相手にこうした労を厭わなかったところに、文明の人間性が滲み出ており、さらに文明短歌の特性も窺えるようである。

六

以下、できるだけ簡略に記すが、第七回目の来訪は昭和四十年十一月十八日である。同月十五日東京出発、ほぼ九州を一周して、二十七日帰京したなかの来別であった。この足跡は、翌年の「短歌研究」一月号に発表した「続西南雑詠」一二三首の大作となって残っているが、(第十歌集「続青南集」〈昭和三十六年〜四十一年〉に収載)別府での歌はない。だが、早くアララギ会員となり、一首一首工夫した構成のなかに女性らしい細やかな気持ちを含めた歌を残した、吉光ますみの「吉光ますみ歌集」の年譜に、「十一月十八日、午前十時半頃、土屋

文明先生、テル子夫人お立寄り下さる。「昨日、国東にゆき、昨夜は日名子ホテルに泊ったよ。」とおっしゃられ



土屋文明最後の来別となった昭和四十二年五月二十日、城島での撮影。中央、文明。向って右側、テル子夫人。文明の左側、瓜生鉄雄。長門莫。

る。」の記事がある。朝の街を散策中、会員として心に留めていた吉光の苗字を店の看板に認めて、突然、北浜一丁目の家に立寄りられたのであった。

来別の最後となる第八回目は、昭和四十二年五月二十日である。十二日に東京を発ち、十四日に宮崎の歌会に出席し、その後、南九州各地を巡った。そして二十日は、別府駅の西方にあったホテル金波で、瓜生鉄雄司会による歌会が開かれたが、それに出席し、全首に的確な批評を行なった。参加者約七十名であった。

翌日の歌会開催地福岡へ、会後湯布院を経由して向かった。途中、城島で小憩したが、辺りに咲いていたキリシマツツジの分類から特徴まで、同行者に細かに説明したりした。それから猪の瀬戸に寄り、湿原植物を観察した。文明は植物にも詳しく、単なる愛好家の域を遥かに超えて専門的でもあった。書けば一冊の植物の本がすぐに出るほど詳しいと、歌壇でも言われていた。猪の瀬戸ではそうしたことが直に表われ、非常に喜んで観察に当たったのである。八回目の来別に関した歌は見当らない。この時、文明は七十七歳であった。